

ランゲージ・ラウンジ、浦島太郎

ー時代を超える「生教材」考ー

後藤 加奈子

ルーヴァン・カトリック大学、リエージュ大学

要旨

外国語教育の現場における魅力的な教材とは何であろうか。本稿では、教育的配慮に基づいて制作されたいわゆる「語学教材」ではなく、一般に「生教材」(なまきょうざい)「レアリア」と言われるリソースの在り方とその利用の可能性について、ベルギーのフランス語圏の大学における日本語教育現場の様子を報告することを目的とする。なお、本稿で問題となるのは、オンラインリソース以外の「生教材」である。インターネットに支配されているかに見える昨今の外国語学習環境において、教師はいかに時代の波に乗りつつ、且つオンラインの教材に頼りすぎることなく、個性的で時代を超えた魅力的な教材や学びの場を提供できるだろうか。この問いへの答えを検証するため、本稿ではベルギーの日本語教室での二つの実践例を紹介する。

【キーワード】 レアリア、生教材、学ぶ空間、昔話、他者への視線

Keywords: Realia, Authentic educational materials, Learning space, folk tale, communication with Other(s)

1 序

本稿は、外国語教育の現場における魅力的な教材の在り方とその利用の可能性をめぐる考察である。ここでは、一般に「生教材」(なまきょうざい)や「レアリア」と言われるリソースに注目し、ベルギーのフランス語圏の大学における日本語教育の現場の様子を2つの実践例をもとに報告する。

最初の例は、「ランゲージ・ラウンジ」という、新しいコンセプトに基づいた教室空間を校舎内に設けて言語と文化を同時に学ばせようとする試みである。これは、学習者が対象言語の母語話者と生身のコミュニケーションをとりつつ、通常の授業の枠を離れて文化と言語を同時に学ぶための試みである。2つ目の例は、江戸時代に作られた手書き、和綴りの絵本「浦島太郎」の高精度スキャンを用いた、昔話という文学ジャンルを用いた学びの体験である。日本語学習者たちはこのアクティビティを通じて日本の昔話の内容を知り、その語り口(昔話特有の文体)を学び、それを容易な日本語に書き直すという作業を体験したが、作業をすすめるうちに、物語の内容を自分たちの母国語(ここではフランス語)に翻訳し、日本語を知らない家族やクラスメートに紹介したいと思うようになった。結果として、このアクティビティは「浦島太郎」という日本人に親しみの深い昔話をめぐるさまざまな次元の学び(発見、理解、受容、そして再発信)の欲求を刺激する、総合的学びの一例となった。

2 実践例の紹介

2.1 生教材とは何か

実践例の紹介に入る前に、「生教材とは何か」という点を明らかにしておく必要があるだろう。筆者は「生教材」とは日本で暮らす人々が日常的に使っている日本語のことであると理解している。本稿では、実生活で使われている日本語活動をそのまま切り取り、音声、画像、映像、新聞記事、ブログや SNS の記事などを用いて、学習者の応用的な日本語力を試すアクティビティを行うことを「生教材を用いた学習」と呼ぶ(国際交流基金 2006、三原龍志 2008) ことにする。その際に、「実生活で使われている日本語活動」という点に注目する。敢えて言うなら、それが「21 世紀の日本人の実生活」に直接根ざしたのではなく、例えば「江戸時代の日本人の実生活」から生まれたものであったとしても、それはれっきとした「生教材」になりうるのだということである。

2.2 ルーヴァン・カトリック大学 (フランス語圏) における日本語教育の現状

筆者の所属するベルギーのルーヴァン・カトリック大学 (フランス語圏)¹における日本語教育は以下のように行われている。日本語のクラスのレベルは全部で3つあり、入門クラス (A0-A1)、初級クラス (A1-A2) と中級クラス (A2-B1) が設置されている。当大学に日本語専攻、日本学専攻という区分は存在しないため、大学に所属するすべての学生 (ならびに学外の一般の学習者) に門戸が開かれている。授業時間は毎週 2 時間、年間 30 週で、1 年間で合計 60 時間日本語を学ぶ計算である。入門の学生は 50 人前後 (25 人のグループが 2 つ構成される)、初級の学生は 20 人前後、中級の学生は 10 人前後である。学生の大部分はフランス語話者であるが、ベルギーとエラスムス交換留学協定で結ばれたヨーロッパの協定大学からの留学生や、日本人を親に持つが、日本以外の国で育ったという「言語的文化的に多様な背景を持つ」(眞嶋 2019) 学生も、実践的な日本語力の維持・向上のため、これらのクラスを受講することがある。

2.3 ランゲージ・ラウンジ

ランゲージ・ラウンジとは、従来の教室活動—教師が教壇から学生を見下ろし、学生は机に向かって教科書を読み、教師の言うことを聞き、板書をノートに書き写すといった活動—とは一味違った活動をめざす学習空間のことである。具体的に言うならば、学生たちをリラックスさせ、「勉強している」という感覚を呼び起こさせずに、彼らの実生活に根差した活動を提案し、楽しくそれらに参加することで結果として「学び」が実践されることを願う、そういった教育的態度のことを指す。そうした教育活動が可能になるような学習空間をデザインするところから、ランゲージ・ラウンジのプロジェクトは始まると言っていいだろう (Kronenberg 2011, 2017, Shevchenko, Jones, Savoth, Evans 2014)。ルーヴァン・カトリック大学の現代言語学院 Institut des langues vivantes は、大学上層部からの資金援助を得て、学習者がよりリラックスして学べる空間を目指して語学教室を改装するプロジェクトを 2017 年に発足させた。教師たちの活発な話し合いと、建築家、インテリアデザイナーとの数々の会合を経て、語学教育棟の中で最も大きい教室を大幅に改装することが決まった。開放的な空間を目指し、壁の一部にガラスをはめ込み、キャスター付きの移動可能な机と椅子、快適なソファ、カラフルなスツール、プロジェクターやスクリーンの他、自由にアイデアの殴り書きができるような巨大なホワイトボードをひとつの壁の全面に設置することが決まった。小さなキッチンスペースや、洒落た本棚も設置された。床の

カーペットを取り払い、手触りのよい板張りの床に張り替える作業も行われた。ランゲージ・ラウンジは2018年2月に完成し、教師たちの意見を取り入れて「Espace L」（エスパス・エル（LはLangagesのL））という名前がつけられた。



写真1 現代言語学院のランゲージ・ラウンジ建設プロジェクト案（現代言語学院内部資料）



写真2 2018年2月にオープンしたランゲージ・ラウンジ（エスパス・エル）（筆者撮影）

エスパス・エル（Espace L）の完成を待つ間、この新しい空間でどんな活動を展開したいかというアンケートを学習者と教師たちに向けて実施し、年間のアクティビティの予定表を作成した。以下に、2018年2月のオープン以来、行われている主なアクティビティの例を示す。

- 特定の言語を話す会話サークル（隔週）
- 各言語の教師によるチューター制度（主に試験期間の直前）
- 英語、ドイツ語教師によるヨガ・セッション（不定期）
- お菓子作りが得意な英語教師たちによる英語によるクッキー・タイム（不定期）

- アイルランド出身の教師による聖パトリック・デーのお祭り（毎年恒例）
- 留学生たちが自国の料理を作って振舞うフード・パーティー（不定期）
- 多言語での合唱の練習（一つの歌を複数の言語に翻訳して、替え歌のようにして合唱する）（不定期）
- 語学教師たちのための研修や会議（不定期）

教師たちの提案により設置されたアクティビティの中で特記すべきものは、試験期間の直前に英語、オランダ語、スペイン語、ドイツ語などの必修外国語の教師が手の空いた頃からラウンジに赴き、学生たちの質問に答える、というチューター制度であろう。ちょっとした質問があるときや、どうしても理解できないポイントがあるとき、しかし該当教師との面会の予約を取るほどではない、という場合などは、開放的な雰囲気ですら予約不要、ふらりと立ち寄って質問ができる空間というのは、学習者にとっても足を運びやすいように見受けられる。

この空間を使用するにあたり、教師たちに課されたルールが二つある。それは「鍵をかけないこと」、そして「通常の語学授業には使用しないこと」である。この空間に足を踏み入れることで学習者の気持ちがりフレッシュし、通常の授業とは違う空気が流れることがねらいなのだ。一部の壁をガラス張りにしたことで、ラウンジの中の様子が外から見えるため、前を通過する学生たちは興味をかきたてられるようだ。そんな学生たちが思い切ってラウンジの中に入ってアクティビティに参加してみることで新たな世界がひらける。そんな「アクシデント」も、教師たちは期待している。

2.4 日本語授業でのランゲージ・ラウンジ利用例

日本語の授業では、2018年と2019年の2回にわたり、ルーヴァン・カトリック大学と交換留学提携を結んでいる日本の私立大学から春休みのフランス語研修に訪れていたフランス語専攻の学生15人程度（A2・初級レベル）と現代言語学院で日本語を学ぶフランス語母語の学習者15人程度（同レベル）をランゲージ・ラウンジにいざない、「お互いの言葉を使って意思疎通する」という会話アクティビティを行った。



写真3 ランゲージ・ラウンジでのアクティビティの様子（筆者撮影）

大学のあるルーヴァン・ラ・ヌーヴの街のおすすめスポットや（地図を見ながら日本語で説明する）、福岡・博多市のおいしい食べ物の紹介をする、というアウトラインを教師側が提示し、事前の準備時間は設けないが時折スマートホンなどを使用してお互いを「ヘルプ」してもよいということにした。制限時間は60分と定め、教師はなるべく介入せずに、学生たちの奮闘する様子を見守ることに努めた。ベルギーの日本語学習者たちにとっては、

「教育的配慮のない」（つまり日本語教師ではない）日本語を使う同年代の日本人と、教科書のない状態で触れ合うまたとない機会である。照れもあってか、はじめはなかなか話が盛り上がらないが、教師の存在が視界から消え、自分たちが普通の教室とは違う空間にいて、通常の授業とは異なった体験をしているのだという意識も手伝ってか（ガラス越しに他の学生や教師たちがちらちら見ていくのもポイントである）60分は瞬く間に過ぎる。アクティビティの後に互いの連絡先を交換し、その後も大学のキャンパス内で会ったり、一緒にベルギー名物フライドポテトやワッフルを食べに行ったりする学生も毎年必ず現れるばかりでなく、ベルギー人学生がその後日本に留学するときに相談に乗ってもらったりもしているようである。年間60時間という決して多いとは言えない日本語学習時間の中で、さらに短い60分という限られた時間内ではあるが、ランゲージ・ラウンジでのアクティビティによって、ベルギー人学生は日本からの大学生という「実際に使われている日本語を話す人々」（＝生教材）に触れる機会を得、彼らと実際に日本語（とフランス語）を使って意思伝達をすることができる。そして当の日本人学生たちにとっても、フランス語を母語とする同年代の学生たちとフランス語で会話ができるというのは、フランス語の教員に見守られながら文法の課題をこなすのとはまた違った意味合いを持つ学習体験となったようだ。ランゲージ・ラウンジという、学習・教育意図を直接的に学習者に感じさせない空間は、そのようなアクティビティに特に適していると思われる。

もちろん、ランゲージ・ラウンジで異なる言語の母語話者同士の邂逅を試みさえすれば、それは自動的に効果的な学習体験となるというわけではない。貴重なアクティビティ時に十分に力を発揮できるように、ベルギー側の学生は、日本語での自己紹介を事前に練習するなど、入念なウォーミングアップを行っていることを付記しておく。また、教師からタスクとして与えられるテーマに沿った会話の内容だけではなく、何と言えよいいのか迷ったり、スマートホンや電子辞書で正しい言葉を探したりするいわゆる「舞台裏」の作業の一つ一つにも、自分の母国語を外国語として学んでいる相手にとって興味深い「生教材」となりうる要素が含まれていることを忘れるべきではないだろう。例えば、日本人学生がかなりの頻度で携帯しているコンパクトな電子辞書は、このアクティビティを開催するたびにベルギーの日本語学習者の強い関心を集めている。

2.5 浦島太郎プロジェクト

2.5.1 プロジェクトの背景

ルーヴァン・カトリック大学図書館は、1920年代に日本から寄贈された1万冊以上の日本語の本のコレクションを所蔵している。コレクションの内容は主に江戸時代に作製された和綴じの書物や絵巻物の複製、地図などからなり、通常は図書館の貴重書室に保管されているため、数年に一度の割合でコレクションの一部が大使館などで展示されるほかは、一般の読者の目に触れることはない。



写真 4 2016年にルーヴァン・ラ・ヌーヴ駅併設の文化センターで蔵書の一部が公開された。(ルーヴァン・カトリック大学公認画像 Benjamin Zwarts 撮影)

筆者は2011年に着任してまもなく、本コレクションをたびたび閲覧する機会に恵まれた。こうした貴重書の抱える問題は二つある。一つ目の問題は、作品の保存環境をいかに維持・改善するかということであり、もう一つの問題は、こうした書物の存在をいかに学生や教職員、一般読者に知らせるかということである。最初の問題は、書物が非常に古いものであるという点から、図書館全体の予算のやりくりにも関係してくるのだが、莫大な資金を投じて保存に力を注いでも、本自体の存在が忘れ去られたままでは、何の意味もなさない。これらの貴重な書物が、当時皇太子であった裕仁親王が、第一次大戦の戦禍により全ての蔵書を失ったルーヴァン大学図書館²の現状を憂い、少しでも応援の意を示したいという気持ちに端を発し、日本からはるばる船で運ばれたものであったことを思うと、世界の文明や知識に触れる場所としての大学図書館の存在意義が浮き彫りになってくるように思われる。二つ目の問題に対しては、高精度のスキャン・システム³を用いることで、非常に解像度の高い美しい画像をインターネット上で公開し、世界中から閲覧できるようにすることで解決策が見いだされた。⁴オンラインで閲覧可能な作品の数はまだわずかではあるが、文明の利器のおかげで文字通り地球の裏側からでも時差を気にすることなく無料でこれらの書物を閲覧できるようになったことの意義は大きい。

貴重文化財のデジタル化は世界の大学図書館や博物館、美術館が競って進めているプロジェクトである。筆者は、デジタル化されたコンテンツを研究者だけでなく、幅広く日本語、日本の歴史や美術史、製本技術等を学ぶ学生に閲覧する機会を与えることが教育者の使命だと考えている。先述の通り、資料の閲覧そのものは24時間世界のあらゆる場所から（スマートホンの画面でも）簡単にできるようになった。こうした「アクセスの簡略化」の功績は特記すべきであろう。

2.5.2 日本語授業での利用例

次に、日本語授業の枠内で貴重文化財のデジタル・コンテンツは実際にどのように利用できるかという点を検証したい。ルーヴァン・カトリック大学所蔵のコレクションの中で非常に人気の高いものは「奈良絵本」⁵のシリーズで、とくに「うら志摩太郎」（浦島太郎）の物語は、事あるごとに外部に向けて紹介されてきた。

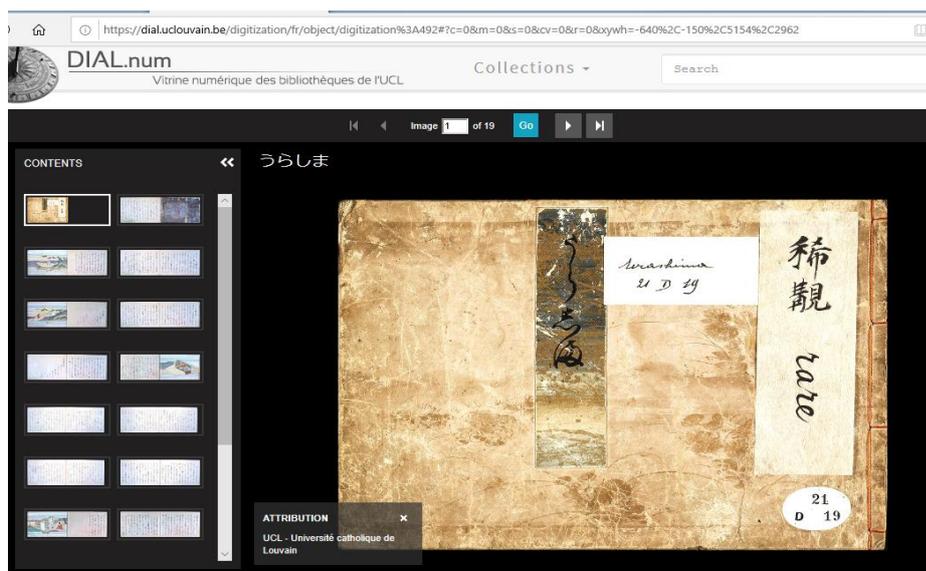


写真5 表紙に「うら志摩」の題名が読める、浦島太郎の奈良絵本のデジタル画像⁶

達筆な毛筆で物語が記され、要所要所に手描きの絵が配置されているばかりでなく、絵の一部に金色の絵の具が使われた豪華な美術品となっている。

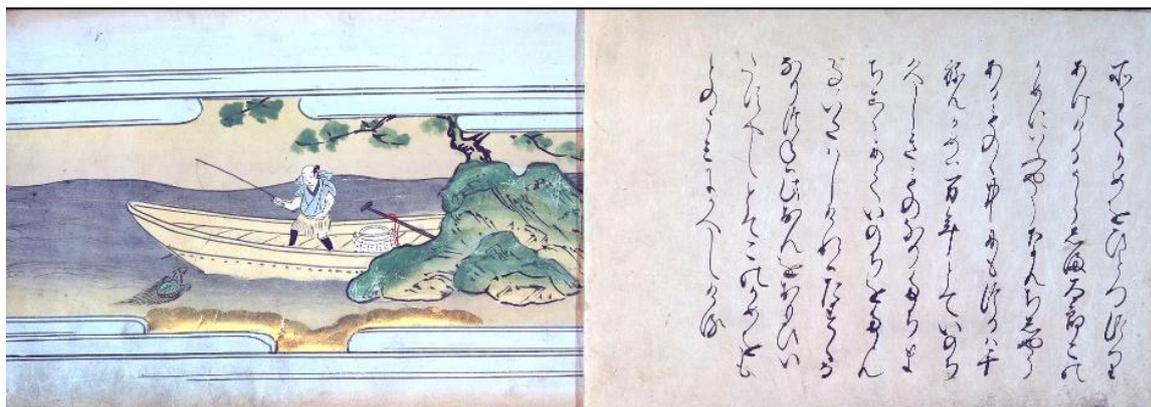


写真6 「うら志摩」の最初のページのデジタル画像⁷

「浦島太郎プロジェクト」は、筆者が担当する B1 レベルの日本語学習者 7 人と一緒にこの書物を実際に手に取ってみることから始まった。江戸時代（17 世紀）の日本人が実際に手作業で作成した本であるという説明をコレクションの責任者から聞いただけでも、学習者たちは好奇心をかき立てられ、同時にこうした「生教材」に実際に触れられる幸運をかみしめたようだった。以下に、実際のプロジェクトがどのように進んでいったのかを段階ごとに示す。

第一段階：浦島太郎の話は比較的短く、わかりやすいので、非日本語話者にもあらすじを説明しやすい。そこで、図書館の貴重書室から通常の教室に戻ったのち、教師が媒介語（フランス語）を使って物語の内容を話して聞かせた。学生たちは、授業後にインターネットなどを使って物語のあらすじを自分たちなりに調べ、フランス語での内容理解を確かなものにするに努めた。

第二段階：その後、物語を日本の昔話の語り口（むかしむかし、あるところに…という紋切り型の冒頭など）をなぞりながら、自分たちが確実に使える文法事項や語彙を駆使し

て平易な日本語で書き直した。(連体形、～て形、受け身、伝聞形など)

第三段階：さらに、おとぎ話風の文体でフランス語訳を作成し、日本語のテキストに添えることにした。

第四段階：テキスト部分の作業が進行するのと並行して、高精度スキャンによるオリジナル画像を活用しようと考え、自分たちが書いている平易な日本語のテキストとおとぎ話風フランス語のテキストに挿絵として添えることにした。

週2時間の授業時間の30分ほどをほぼ毎週この作業にあて、合計3か月ほど作業を続けていくうちに、絵本のいわゆるテキスト部分を自分たちで書き換え・作成することにとどまっていたはずの浦島太郎プロジェクトは、絵本そのものを自分たちなりの方法で作る変えるプロジェクトに変容していった。

さて、このように多方面の能力(日本語の内容理解、日本語での産出、フランス語での産出、オリジナルの絵の抽出と編集)を駆使し、努力、奮闘するにあたり、自分たちの「読者」を設定する – 浦島太郎の物語を誰に聞かせ、読ませることを目標とするのか、という点を明らかにする – ことは作業を進めていくうえでの原動力となった。本プロジェクト遂行にあたり、学習者と教師が設定した目標は以下のようなものである。平易な日本語で物語を語る作業は、自分たちの日本語理解を確かめるため、そして、先述の日本からフランス語研修に来ていた学生たちに自分たちの書いた日本語を読んでもらえたら、という期待のもとに進められた。一方、浦島太郎の物語をおとぎ話風のフランス語で書き直す作業は、日本語学習者ではない自分たちの友達や家族に、自分たちは日本の伝統的な昔話を勉強したのだ、そしてそれをフランス語で語りなおすことができるのだということを知らせるために実行された。主専攻で翻訳技術を学んでいる学生は、流麗なフランス語で浦島太郎の翻訳テキストを書きあげる作業に腕を振るった。平易な日本語の文章の作成にあたっては、日本人の母親を持つ学生がインターネットを閲覧しないで考えぬいた原案をもとに、教師がフランス語との対応を見ながら調整していった。また、浦島太郎のオリジナルのスキャン画像を精密な作業で抽出し、彼らの「絵本」の挿絵として挿入することに成功した(写真7、8)のは、エンジニアが主専攻の学習者の奮闘の結果である。

本プロジェクトは、ルーヴアン・カトリック大学文学部が2019年2月に開催した「日本文化の会」というイブニングパーティで披露されることになった。日本語学習者たちによる絵本「浦島太郎」はA2サイズのカラーポスター2枚という形で展示された。学習者たちはローテーションを組んでポスターの近くに立ち、パーティに立ち寄った人々に「浦島太郎とはどのような人物なのか」「なぜ浦島は老人になってしまったのか」といったことを説明した。彼らの説明は主にフランス語ではあったが、数か月前の段階では彼らにとって未知の人物であったはずの「ウラシマ」という男性の境遇を、実にリアルに感情をこめて語る姿が印象的であった。



La boîte contenait également une plume de grue qui vint se poser sur le vieil homme et le transforma en oiseau. Urashima prit son envol et observa une dernière fois ce qui avait jadis été son village.

はこ にい つる はね うらしま ずめた つる が
箱 に入っていた鶴の羽根が、浦島の姿を鶴に変
えました。鶴になった浦島太郎は、自分の村を見
ながら、飛んでいきました。

うらしま - *Urashima*, 17e siècle. Manuscrit 1 vol - ill. en coul. UCL-BMAG- Réserve précieuse RES JAF 21D9
(En filigrane) 絵本野山草 - *Ehon noyamagusa*, Y. TACHIBANA, 1755, UCL-BMAG- Réserve précieuse RES JAF 17D6 fasc-5

写真7 完成した「浦島太郎」の絵本ポスターの一部

3 考察、結論、改善点

以上の二つの「生教材」の使用例から見てくることは、どちらの事例でも、学習体験を通じて学習者が何らかの具体的な達成感を手に行しているという点である。また、この達成感、動詞の活用の暗記や、課題を期日までに終わらせるという義務感に伴われた学習の記憶としてではなく、身体と心に刻まれたポジティブな活動の記憶として学習者の中に残っているように感じられた。具体的に言うと、ポジティブな活動の記憶とは、日本人の学生と日本語で話題をつなげようと必死に頭を振り絞った記憶や、自分の日本語が時折通じてとても嬉しかったという記憶（ランゲージ・ラウンジでの交流）であったり、江戸時代の貴重な書物を21世紀の自分がベルギーのみんなに紹介するのだ、という自負に助けられて、原画の挿絵と自分たちの日仏テキストを同居させるといった大胆なチャレンジに挑んでいく意気込みと満足感（浦島太郎プロジェクト）であったりした。日頃日本語を学んでいても、日本語を実際に使う場面が極端に限られている西ヨーロッパの学習者たちにとって、リアルタイムの日本からやってきた学生たちとのドキドキしながらの交流や、江戸時代の職人によって時間と手間をかけて作られた「本」との出会いは、まさに「実生活で日本人が使う日本語」に触れる機会であったばかりでなく、自分たちが「本物の」—シミュレーションではなく、本物の—日本語活動に触れ、且つコミュニケーションに能動的に関わった、という自信を彼らにもたらしたと言えるだろう。

筆者は、外国語を学ぶことの意義のひとつは、学習対象言語を母語とする「他者」（ここでは日本語を母語とする日本語話者）、または学習対象言語を知らない人たちという「他者」（日本語を知らない自分の家族など）を理解する力を深めることであると考えている。本稿では、時代を超えうる魅力的な「生教材」の可能性というテーマに焦点を当て、同年代の日本語話者とフランス語話者を邂逅させる試みと、テクノロジーの力を借りて4世紀前の日本からやってきた昔話の本をひも解く試みを紹介した。この二つの例を出発点とし、言語と文化の密接な絡み合いを意識しながら、今後も教育活動に励んでいこうとの思いを新たにした次第である。

本稿を終えるにあたり、「生教材」を論じる上での今後の改善点を簡単に記しておく。第一に、素材が「生」でありさえすれば、その教材は必ず良いものである、という認識には慎重になる必要があるという点。例えば、学習者の興味に積極的に働きかけうる「生」の教材をどのように探し、どういった文脈で使うのか、という点について論じた先行研究（高

嶋 2015、小河原 2007) によれば、海外で日本語を教える教師側が日本語学習者の文化背景を知り、学習者にとって身近な話題を日本語の授業に取り入れることが重要であるとされている。というのも、日本人教師にとっては外国と言える国において日本語を母語としない学習者に日本語を教える場合、彼らになじみのない語彙や話題を与えても、混乱や不安を招くことになってしまうからである。第二に、選んだ生教材が学習者の日本語学習体験にもたらしうるプラス面・マイナス面での影響にも注意を向けるべきであるという点。本稿で紹介した二つの実践例は、結果としては学生のやる気を刺激し、もっと知りたい、もっと話したいという感情を彼らから引き出すことに成功したと言えるだろうが、本稿では学習者にとって身近な事物という視点で教材を選ぶということはせず、むしろ教師側からの「これは必ず貴重な経験と思ってもらえるはずだ」という独断に基づいて選ばれた生教材を一方的に学生に提供した例しか検証していない。学習者の視点にも注意を向け、教材選びの基準や教材の与える影響についても気を配ること。この二点を本稿では追求できなかった反省点としてとらえ、今後の課題としたい。



写真 8 浦島太郎プロジェクトの成果 (実物は A2 サイズのポスター 2 枚)

注.

- ¹ 本稿において「ルーヴァン・カトリック大学」の名が記される場合は、すべてフランス語圏におけるルーヴァン・カトリック大学 (UCLouvain) のことを指す。
- ² 当時、ルーヴァン・カトリック大学はベルギーのオランダ語圏にのみ存在していた。
- ³ ルーヴァン・カトリック大学の貴重書室では、書物のデジタル化に特化したスキャン機器 (例・Spigraph 社の i2s Copibook) にデジタルカメラのレンズを接続し、作品から 1 メートルほど離れた場所から撮影するという方法で貴重書のデジタル化を行っている。
- ⁴ ルーヴァン・カトリック大学のデジタル・アーカイブカタログ <https://dial.uclouvain.be/digitization/fr/digital-collection/collection-japonaise> (2019.12.20)

⁵ 奈良絵とは、室町末期から江戸時代にかけて奈良の絵仏師たちが注文を受けて大量に描いた絵画のジャンル。江戸期には、おとぎ話の挿絵に奈良絵をほどこした豪華な冊子本が作られ、嫁入り本などとして流行し、奈良絵本とよばれた。

⁶ <https://dial.uclouvain.be/digitization/fr/object/digitization%3A492#c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-640%2C-150%2C5154%2C2962> (2019.12.20)

⁷ <https://dial.uclouvain.be/digitization/fr/object/digitization%3A492#c=0&m=0&s=0&cv=2&r=0&xywh=-1%2C-830%2C7433%2C4271> (2019.12.20)

<参考文献>

- 小河原喜朗 (2007) 「日本語教育で映像を使うと」 国立国語研究所第 32 回ことばフォーラムハンドアウト.
- 国際交流基金 (2006) 『日本語教師必携 すぐに使える「レアリア・生教材」アイデア帖』, スリーエーネットワーク.
- 高嶋幸太 (2015) 「学習者の身近な事物を取り入れた授業—海外で日本語を教えた経験のある教師対象の調査から」 『海外日本語教育研究』 海外日本語教育学会, 創刊号, pp. 69-85.
- 眞嶋潤子 (2019) 「グローバル化がローカルな日本語教育に与える影響について」 (ヨーロッパ日本語教師会第 23 回シンポジウムにおける基調講演) .
- 三原龍志 (2008) 「レアリア・生教材」 国際交流基金, 日本語教育通信『日本語の教え方 イロハ』 第 8 回.
- Kronenberg, F. (2017) «Developing Built Pedagogy : Physical Language Learning Spaces in a Digital World », Keynote Speech at the Symposium “Innovation pédagogique et apprentissage des langues”, Louvain-la-Neuve, Belgium.
- Kronenberg, F. (ed.) (2011), *Language Center Design Manual*, The International Association for Language Training Technology.
- Shevchenko, N. and Jones, M. and Savoth, N. and Evans, C. (2014), *Language Center Use and Design*, The International Association for Language Training Technology.

<参考 URL>

<http://iallt.org> (2019.12.20)

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/archive/iroha/backnumber.html> (2019.12.20)

<https://dial.uclouvain.be/digitization/fr/digital-collection/collection-japonaise> (2019.12.20)

<https://dial.uclouvain.be/digitization/fr/object/digitization%3A492#c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-640%2C-150%2C5154%2C2962> (2019.12.20)

<https://dial.uclouvain.be/digitization/fr/object/digitization%3A492#c=0&m=0&s=0&cv=2&r=0&xywh=-1%2C-830%2C7433%2C4271> (2019.12.20)